



香曾我部義則先生の今月のカルテ ⑤2

慢性痛とペインクリニック

■プロフィール こうそがべ・よしのり 昭和54年に岡山大学医学部卒業後、同大学麻酔科・蘇生科講師、岡山労災病院麻酔科第一部長に。平成16年から現職。日本麻酔学会専門医。日本ペインクリニック学会認定医。現在日本麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本慢性疼痛学会、国際疼痛学会などに所属

梶木病院麻酔科・ペインクリニック科の香曾我部義則先生が、痛みの治療について説明してくれるコラム。痛みが持続すると、精神的にも多大な負荷が生じます。今回は、痛みの治療を進めるにあたって有効な心理テストについて紹介します。

痛みの治療をスムーズに進めるためには

心理的問題も同時に検討する必要があります

身体に生じる痛みの原因が、器質的な要因か心理的要因かに区別することは難しい問題です。安易に区別してしまうと、治療による改善が得られないばかりか悪化させることにもなります。従って、身体的問題と心理的問題の両者を同時に検討する必要があります。

痛みが持続すると精神に多大な影響を及ぼします。痛みによって睡眠や食欲が阻害されれば、日常生活にも大変な負荷が掛かり、心理的にも大きなダメージを受けます。逆に心理的な圧迫は痛みの表現に強い影響をもたらします。つまり痛みが強ければ大なり小なり抑うつ的なになり、うつが強くなれば痛みが増強しや

すくなります。このように慢性痛の特徴は、身体的な痛みの持続と抑うつ状態を引き起こす事にあります。それゆえ、治療をスムーズに進めるために痛みの原因となる障害の検査はもちろんですが、心理・社会的な要因も同時に評価する必要があります。

しかし心理評価は簡単ではなく、正確な評価を行うには専門的な知識を有する心療内科や精神科に委ねる必要があります。残念なことに日本ではこういった専門分野の先生が最初に痛みの診察にあたることはまれです。頸(けい)痛、肩痛、腰痛では整形外科、頭痛、胸痛、腹痛は内科にかか

る事が一般的です。そこで、痛みを取り扱うペインクリニックでは簡単な心理テストを行い治療の参考にしていきます。一口に心理テストといっても100種類以上のテストが日本では行われています。その中で抑うつと痛みに関して臨床的に評価が高く、簡便なテストのSDS (self-rating depression scale=自己評価式抑うつ性尺度)を用いています。

これは質問項目が20項目からなり各項目には4個の選択肢がありその1個に○をつけます。1点から4点の配点で最高で80点となっています。10

分ほどで判定できます。

慢性疼(とう)痛患者さんの検査では、仕事上の能力や社会生活への影響、気分、睡眠、性活動、他人との関係について問題にする必要があります。SDSは食欲や睡眠といった基本的な生活の質だけでなく、朝方の気分、泣いたり泣きたくなる、気分の沈み、将来の希望、物事の決断をためらうなど痛みだけではない項目も含まれ、うつの評価尺度を調べるのに大変有用です。ほかには Beckのうつ状態自己評価尺度、東邦大式抑うつ状態自己評価尺度もよく用いられます。

あくまでスクリーニングの方法ですが、初めて痛みの診察を受けられる時にはこの心理テストを受けると良いでしょう。

梶木病院(西花尻)

梶木病院(西花尻)

梶木病院(西花尻)